

土地改良区とは、地域農業を守るため、水田や畑などの農地を整備し、農業用水路等の管理をする「団体」のことです。愛称、水と里ネット。

中津留土地改良区

水と里ネット中津留



四角いかたちの水田は 農業の夢の結晶だった

例えばここに田舎の風景を描く。遠くに見える山々は、緩やかなカーブをつないでその稜線とするだろう。そこから流れる清流は、蛇行した二本の線を平行に走らせて表現しよう。

では、山すそに広がる水田はどうか。やはり大小の長方形をもつて、その代わりとするのではないか。ところで、なぜ水田はそのような形をしているのか。もちろん、農業が機械化されたいま、不規則な形の水田より効率的に作業ができるからである。

だが、水田がこの形状に至るまでに、たくさん汗と技術が眠っていることを知る人は少ないだろう。もともと国土の狭い日本では、限られた土地を余すところなく切り取って耕地としたため、その面積は概して不整形で狭小だった。

これら小さな水田をまとめて一定の大きさにし、かつその区画を規則的にそろえることは農業の夢であり続けたが、それを具現化する事業こそ中津留地区で行われた「ほ場整備」である。

成功の鍵は 無形の努力にあり

ほ場整備はハードとソフトの両面における有形無形の苦労の上に成立する大事業と言えるだろう。

ハード面とは水田をはじめ、農道、用排水路、畦畔（あぜ道のこど）等の工事による整備であるが、土地に根付く権利関係の調整や農地の集約などのソフト面の対策もとても重要である。

物理的に土地の形状が変われば、当然、それに伴い所有権などの権利関係の移動が必要となる。この移動は多数の関係者間の理解と同意によってのみ実現するが、この際、地元の仲介を担うの



(上)ほ場整備により綺麗に整理された中津留地区の水田群。意欲的な農家の挑戦にも十分応えられる水田になった。(中)ピーマンのハウス栽培をする金丸さんご一家と従業員の皆さん。ほ場整備により整った用排水路はハウスの環境も向上させる。(下)事業の竣工記念碑と関係者。左から4番目が中村理事長。左から5番目が南那珂農林振興局の原局長。



が土地改良区だ。

「将来の話をし、どうか地元の方々に納得してもらいました。」中津留土地改良区の中村丸夫理事長は事業当時を振り返る。

権利の交換は関係者の利害と主張が絡み合い、時には交渉が難航することもあった。

それ故、今に見られる中津留地区の整備された水田群は、地元の声に根気強く向き合った改良区の無形の努力の結晶と言えるだろう。

「スタートはこれからですよ。」中村理事長は事業竣工だけに満足していない。

ブランド米が乱立し消費者の舌が肥え続ける中、新しいニーズにいかに対応するか、地域農業の血路がある。この度の竣工を機に、改めて、挑戦を続ける生産者の方を考えたと思った。